

京都の躰を語る女性の会会報

おはようさん

第11号

わたしたちは躰といひささか古びた言葉を持ち出し伝統と文化の町京都において今も戸ぐ「躰」や「訓え」に学び語ることから新しい子育て文化を提唱します

京都の躰を語る女性の会

〒616-0022

京都市西京区嵐山朝月町68-8

京都府神社庁内

TEL075-863-6677

FAX075-863-6665

http://www.net-k.co.jp/situke

京職人の伝統と技／宮迫（はこせこ）・坂崎さん

量産には馴染めない
だから今も顔の見えるお付き合いを続けて
います

*宮迫（はこせこ）造り五十三年。天神さんの北門からほど近い工房に、坂崎さんを訪ねました。お迎えいただいたのは松苗さんとおっしゃるお弟子さん。「このあたりは昔、あちこちで機織りの音が聞こえたものです」「ここでも町屋が姿を消し、代わりに小綺麗なマンションが建ち始めました。一抹の寂しさとともに路地を曲がり玄関に立つと、坂崎さんの温和な笑みが在りました。

坂崎さん：私がこの仕事についたのは二十五歳頃でしょう。義理の兄が手ほどきをしてくれたのですが、それはもう面白くて夜通しでも平気で、気が付いたら朝だったというような調子でした。師匠は職人気質を絵に描いたような人で、とにかく仕事場と道具は常にピカピカ。きれいにしないと気がすまない人でした。今は息子に代を譲り隠居されていますが、

「仕事が粗い」と、気持ちはまだまだ現役さながらです。

三年目くらいで独立したものの、納得のいく作品ができるまで試行錯誤を繰り返したものです。その間に仲間から組合設立の話も持ちかけられたりしましたが、どうも組織とか力関係に身を置くのが嫌で、おざなりな事で終わってしまいました。今この業界は横のつながりが稀薄で、情報交換も皆無に等しく、後継者不足も至極当然という有様です。

うちのお得意さんは、昔からずっと変わっていません。「もっと時代のニーズに合うものを作れば儲かるのに」そんな助言も聞こえてくるのですが、どうもこの「量産」という二文字を躰が受け付けないんです。そんなわけで婚礼用の昔ながらの宮迫を、ひとつひとつ手仕事でこしらえています。これまで皇室をはじめ著名人の婚礼用として特注の宮迫も手がけてきました。お名前が織り込まれた生地を使ったり、鏡の窓が六角形だったり、それはもう凝ったものばかり。そういうご指名の仕事は大変ですが、完成したときの喜びもひとしおです。松苗さんは今や弟子というより相方です。これからは二人で坂崎の宮迫をこしらえていきたいと思っています。

松苗さん：こちらでお世話になって、二十五年が経ちます。助手の求人広告がきっかけだったのですが、娘時分からこういう手先を使うことが好きでしたのでいつも楽しくお仕事をさせていただいています。

七五三などの宮迫は厚紙のハリボテで、口も開かないようなものもあります。レンタル衣装なんかはそれで充分なのかもしれません。でも、ここで造られている宮迫は真正銘の本物。生地は正絹、綿で膨らみを出した蓋、一本糸でかがられた側面や縫い込まれた縁取り。どれも昔ながらの仕立てになっています。ただ、付属品は時代と共に簡易化され、*びら簪もスチール製のプレス加工品だったりというのが現状です。行程で最も気遣うのは作業台や道具に糊が残らないことでしょうか。完成寸前であらぬ所に糊が付着した



婚礼用の“はこせこ”

ら一貫の終わり。今までの苦労が水の泡になるから
です。この糊は昔、「かんばい粉」というお米の粉
を使ったそうです。他界された奥さんから、「毎朝糊
を炊いてその日の仕事に間に合わせた」というお話
しを聞いたことがあります。

もう一つ気をつけているのが道具です。「裁ち鋏は
こここのん」というこだわりがあり、年に数回研ぎに
出します。また、鏝(こて)も消耗品でありながら、
手に入らないという難儀な代物。電機鏝ではこの小
さいサイズがないうえに、鏝職人さんがいなくなっ
て大変です。だからもう大事に大事に使うしかあり
ません。

最近老眼が進んできたみたいなんです。この前、
裁ち目のずれを見た師匠が「目、悪くなったんちがう
か？」とご指摘が・・・さすがというか、心境は複
雑です。(笑)



本体と帯の地模様を合せて見せる坂崎さん。薬缶が載る火鉢に専
用の鏝が見える。今ではこの鏝を作る職人さんがいない。



弟子の松苗さん。本体のきれいな刺繍飾りの縫い目を見せて、こ
こ部分も下請けの職人さんの技がいるんです、と話す。

最後に今の家庭教育、
躰についてお聞きしました。

坂崎：そらやっぱり、ええ家庭にはええ子が育ちま
すやろな。今は両親共働きが普通で、「家」が疎か
になってしもた気がします。私には二人娘がおりま
して、一人はアナウンサーで、もう一人は教育者で
す。結婚後も仕事は続けておりましたが、子どもが
小さいうちは子育てに専念する言うて休業してます。
私もそれは大賛成ですね。

松苗：宮迫は江戸時代、奥女中たちが身につけてい
た装身具で、中に鏡が入っているのはお守りの意

味もあつたそうです。地域によっては母親がお嫁に
持ってきた宮迫を、娘が嫁ぐ日に持たせてやるという
風習が残り、何代も受け継がれた骨董品が在りま
す。数百年前の白檀の香りが息づく匂い袋なんて素
敵ですよ。日本にはまだそういうものが残っている
ので、次世代にそれを伝えていくことも大切じゃない
でしょうか。

*宮迫：打掛を着たとき、胸元のポイントとしてつける
刺繍と房のついた飾り。紙ばさみの代わりに使う。懐紙
(今のポケットティッシュ)や鏡などを入れることか
ら、結婚後も常に美しくあるようにという意味が込め
られている。

*びら簪：宮迫の背の部分に差し込み、胸元で揺れる
ように垂らすかんざし。現在の携帯電話ストラップの
ような装飾部品。

△花嫁さんの衣装▽
白無垢、打ち掛け、披露宴のお色直しとして着られる
ことが多い大振り袖・・・。(最近はめっきりドレス派
が主流のよう)華やかな色彩、総柄の着物姿で、手には
末広(扇)を持ち、帯は丸帯(幅広の帯を二つ折りにし
芯を入れ、裏表に柄が施された豪華な帯。かなり重く
て結びにくい)胸元には宮迫、帯前には懐剣(今は飾
りだが昔は本身刀で、いざというとき護身や自害に使
われた)が差し込まれ、帯下には抱え帯(幅5センチほ
どの細い帯)を巻く。

坂崎守さんの連絡先

京都市上京区御前通今出川上る東入る北町647

電話 5146217604

例会報告 京の台所を支える井水

錦市場ぶらぶら散歩

去る五月九日、久々の例会が行われました。錦市場は言わずと知れた京の台所。古くより古都の食卓を支えてきました。その錦をさらに陰で支えてきたのが、滾々と湧き出る井戸水なのです。京を支える大切な井戸水を通じて、錦の歴史や仕来りに触れてみるという企画です。

まず、この錦市場の氏神さんである錦天満宮の大和宮司様より、錦の今昔についてお話を伺いました。お豆腐で作ったというドーナツを頂きながら、戦前の街の様子や、建物に両端が食い込んだ鳥居のお話など貴重なお話でした。

その後、錦市場をプラブラとゆつくり歩きながら、商店街振興組合まで散歩し、次に京漬物の榊吾の宇津克美理事より、錦と井水の関係についてお話を頂きました。錦市場は元々魚屋が多く、新鮮な状態に保つには、冷たい井戸水は欠かせないものだったそうです。また、魚屋だけではなく、八百屋も、豆腐屋も、漬物屋も、どのお店でも井戸は本当に大切にされてきたとのことでした。しかし、今や縦横に地下鉄が通り、大きなビルが建つようになって、だんだんと井戸が枯れるようになってしまったそうです。また、少しでも使わないと水質が悪くなって、終いには使えなくなるケースも多いとのこと。

時恰も「世界水フォーラム」が京都で開催されたばかり。水の大切さと、人間が自然界に及ぼす影響

について考えさせられる一日でした。



錦天満宮大和宮司さんのお話熱心に耳を傾ける参加者。とうふドーナツも頂きました。

錦天満宮
京都市中京区新京極通四条上る中之町537
電話 075-1231-5732

躰

「躰(しつけ)」という言葉、みなさんはどうお感じになりますか？

こどもに躰をするのは親やわたしたち大人の役目です。ですから《親やまわりの大人》であるわたしたちは、こどもを躰しなければなりません。

でもわたしは自問自答してしまいました。「躰」が行き届いた《親や大人たち》つまり、身を美しくしている《親や大人たち》は、はたしてどのくらいいるのでしょうか。

「子をみれば、親がわかり、親をみれば、子がわかる」といいます。何げない、朝夕のあいさつ、食事どきの「いただきます」「ごちそうさま」、手は胸の前であわせましょう。また、こどもは親の背中を見て育つともいいます。日常生活のなかで、わたしたち《親やまわりの大人たち》が、まずは我が身を振り返り、身のこなしや振る舞いに気をつけて「見て、真似て、学ぶ」こどもに無言の躰をしなければなりません。

「躰」という美しい言葉に、間違っても「ぶ」や「お」をつけないよう気をつけたいものです。

田中神社宮司 山田敦子

教育正常化キャンペーンコンサート

「心に響くやさしい調べ」

祇園囃子が街角に漂う七月十三日、三条高倉の京都文化博物館別館ホールにおいて、当会主催のコンサート「心に響くやさしい調べ」が開催されました。

午後一時半と同五時からの二ステージ、折からの豪雨にも拘わらず多くの方々にご鑑賞戴き、会場にふさわしい、大変素晴らしい内容のコンサートになりました。関係各位並びに当日ご来場下さった皆様に、心よりお礼を申し上げます。



ソプラノの山澤さん、ピアノ伴奏は木村さん

第一部はソプラノの山澤直子さんとピアノの木村恵津子さんによる「金子すゝの詩の世界」、第二部はポルトガルギターの湯浅隆さんとマンドリンの吉田剛士さんからなるデュオ、「マリオネット」のコンサート。全くジャンルが異なると言っても過言ではない取り合わせのステージでしたが、開催主旨の重点である「良い音楽を心に響かせて、優しい心を揺り動かそう」という試みは、十二分に達成できたと確信しております。

小規模でも良質のコンサートを、演奏者の息遣いを感じられる音楽会を開催したいという意図は、大規模な広報活動や集客活動と反目する部分があり、多くの反省点を残します。しかし今、実行委員会からは、二度三度と継続して毎年恒例のキャンペーンコンサートに育てて行きたいという声が強く出されております。また、そうなるこそ初めて、真に教育正常化のキャンペーンコンサートとしての力を持ち得るのだと考えております。何卒当会会員の皆様、更なるご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

最後に、当日参加者より寄せられましたアンケート百余通の中から、いくつかを紹介してご報告を閉じさせて戴きます。

- ・感動で、涙が止まりませんでした。雨の中、外出を悩みましたが、参加して本当に良かった。良い日曜日になりました。(女性・四十代)
- ・もつと長時間でも、お聞きしていたかった。より多くの人々に、素晴らしい音楽を伝えて下さい。(女性)
- ・心が美しくなれたように思います。次は、子供達にも聞かせたい。(女性)



熱のこもった演奏を聞かせるマリオネットのお二人
ゲストボーカルも交えて

- ・私も頑張つて、小学校の教員として、子供達の心を育てて行きたいと思えます。(男性・四十代)
- ・小さい頃に亡くした母が、よく歌ってくれていた歌を思い出し、思わず涙を流してしまいました。感動の一夜でした。(女性・七十代)
- ・周囲の人達に対して、もつと優しい気持ちを持つてそんな気がしました。(女性・二十代)
- ・目を閉じて耳を傾けていると、色々な情景がまぶたに浮かんできました。日本の穏やかな田園風景や悲しいほどに鮮やかな夕焼け空、また別れの哀愁漂う船着場やキンモクセイの花。そして、目に見えない「優しい心」までもが、素晴らしい時間を、ありがとございます。(男性・四十代)